慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	堀江帰一教授逝く
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.1 (1928. 1) ,p.167- 185
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280101-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

於ける立法の沿革、適用範圍、就業制限、工場設備、雇傭、扶助に關する規定を解說し、其運用に關する統計を援用し、就中、扶助に就ては五十頁に亘りて微細に論じ盡し、而して鑛夫保護に就ては疾病率及び災害率より鑛夫に對する保護の必要の緊切なることを立論し、法規の解說と運用を例示し、然る後、勞働保護法規の制定は作業能率の上より見るも有利なることを內外の實例に徵して證明し、最後に我國に於て特に重要なる女工の問題と勞働者募集の問題にも論及して居る。

而して第六編に於ては福利施設に就て其必要、效果、實例を概說し、最後の第七編に於ては勞働行政を主管する官廳の組織を略述して居る。

是等の諸論のみにて勞働行政の全班を盡すものであると言ふには異論があるであらう。殊に健康保險及び職等紹介所制度等に就て少しも記する處の無いのは遺憾である。又個々の問題に關する特殊研究としては他に推すべき文獻があるであらう。例へば前田多門氏の國際勞働、山中篤太郎氏の勞働組合法案、北原安衛氏の勞働爭議調停法、木村河司氏の勞働者募集取締令、吉阪俊藏氏の工場法に關する著書の如き其例示である。然かも本書は其關說せる限に於て、就中、國際勞働機關、勞働組合法案、勞働爭議調停法、工場法に關する諸章の如きは、平明簡潔にして參考すべき好文字たるを失はぬ。（昭和二年六月發行東京市神田區松華堂版、定價金四圓巖松堂版、定價金四圓五拾錢）

（昭和二年十二月十七日稿）

園　乾治

堀江歸一教授逝く

高橋誠一郎

近く田中一貞、田中萃二郎、阿部秀助、石田新太郎、神戸彌作の諸氏を失へる我が慶應義塾は今又、堀江歸一教授を喪ふ。教授の死は啻だに我が慶應義塾大學の蒙れる一大損害たるのみならず、又、實に我が學界の一大恨事なり。

教授は本年十二月二日、大阪市に於いて講演放送を行ひ、次いで京都市に移り、同夜岡崎公會堂に開かれたる春秋社主催の講演會に臨み、當夜最終の講演者として壇上に立ち、開講後僅かに十分、腦溢血症を發して卒倒し、意識を失ひながら、猶ほ聽衆に向つて物語るの態を示しつゝありしが、直ちに同市三條御幸町松吉旅館に移され、諸醫家の加療、夫人及び令息の看護も其の效なく、同月九日午後八時十三分を以つて終に永眠す。遺骸は十一日午前六時東京驛に着す。時に夜未だ明けず、殘月影猶ほ鮮かにして、寒氣骨に徹す。遺骸を護りて車を下る者、遺骸を迎へて步廊に立つもの皆聲を飲みて泣く。

教授は明治九年四月二十七日を以て東京に生れ、同二十五年四月慶應義塾幼稚舍を卒業し（當時の幼稚舍は其の課程現今の其れと同じからずして中學程度の教課をも授けたり）、同二十七年正科（凡そ現在の大學豫科に當る）を卒へ、更らに大學部理財科に入りて同二十九年十二月之れを卒業し、

翌年三井銀行に入社せるも、留ること僅かに三週間にして之れを退き、直ちに時事新報社に入りて文筆に從事せり。然るに明治三十二年、慶應義塾大學が同窓中より俊秀を擧げ、第一回留學生として海外に派遣せんとするや、教授は神戸、川合、氣賀、名取、青木の諸氏と共に其の選に入り、同年七月より同三十五年八月まで英米獨の諸大學に於いて經濟學を攻究し、歸朝後、慶應義塾大學に於いて貨幣論、銀行論及び財政學の諸講座を擔當し、傍ら時事新報社に於いて社說欄を擔任せり。後、故ありて時事新報社を辭せりと雖も、慶應義塾の教職に在りて學生を指導すること二十五年一日の如く、唯だ其の間に於いて明治四十三年四月より一ケ年間歐米諸國を歷遊して社會問題の研究に從事せると、大正六年中華民國の逸材梁啓超氏の招聘に應じて三ケ月間北京に於いて幣制を講じたることあるのみ、教授は其の間に於いて慶應義塾大學理財科主任に任命せられ、次いで經濟學部長に選ばれ、明治四十三年十一月には博士會の推薦によりて法學博士の學位を授與せられたり。

教授學界に立つ三十年、內外の政治經濟的思想は其の間に於いて激甚なる變化を來せり。教授は此の變動の渦中に立ちて一方に之れを指導せんと努むると共に、他方には亦た思想的社會的潮流の變化によりて推し移されたり。教授の第一回歐洲遊學の際にはチェンバレーンの關稅改革論の暗示せられつゝありし時代なりしも、歸朝後は主として自由主義を提げて論題に立ち、鋒鋩頗る鋭利なるものありしが、第二回目の滯英に當りては同國自由黨內閣の社會政策が着々として實行せられんとするの氣勢を示し、世論囂々たるものあり、然るに歸朝後、歐洲大戰に際會し、戰時經濟狀態の推移に從ひて生じたる幾多の社會的經濟的病患に當面して我が政府が何等適切なる治療法を講ずることなく、國民生活の安定を確保するが爲めに何等有力なる施設を試むることなきに刺激せられて、教授の態度は著しく變化し、往年の官業反對論者は茲に國有事業の擴張、營利事業の社會化を主張する者と爲れり。教授は又た其の書齋より出でゝ街頭第一線に立ち、勞働運動の自由を主張し、治安警察法第十七條の撤廢を叫び、無意義なる國際勞働會議を嗤ひ、勞資協調主義を排し、社會民衆黨の成立に努力せり。教授が輓近に至つて鋭意提唱せられたるものは實に國家資本主義にして、諸般の事業を國有たらしめ、併せて之れに民主的監督を加へんとするに在るものなり。

教授文を行るの速かなること、宛も駿馬に鞭打つて坦道を行くが如し。著作積んで山を成す。平易明快なる教科書若しくは參考書として永く學界後進の指針たる可きものに「貨幣論」「銀行論」及び「財政學」あり。共に改訂增補を加へて最も廣く行はる。然も教授が晩年に於ける最大なる勞作の結晶として永く我が學界の珍寶たる可きは恐らく大正十三年を以つて刊行せられたる「英國現代の經濟」なる可きか。第十九世紀の始初よりして今日に至る百幾十年の間を通じて、英國の國民經濟が發展し來れる狀態を叙述し、批判せんとする大計畫の一部を公にせられたるものにして、引續き續編を著さる可き公約ありしに拘らず、遂に之れを果すの期なくして已む。教授の書架に存する同書の一部には「三田學會雜誌」第二十卷第七號並びに第二十一卷第一號に掲げられたる「英吉利の炭坑並に炭業經濟」及び「英國炭坑爭議の發展」の二文を附加し、卷頭の餘白には再版の序文たる可き左の文字の記入しあるを見る。

私は大正十一年夏の末頃動脈硬化症と血壓亢進症とに罹つて居ると云ふ診斷を西野博士から下され、自分でも身體に異狀

を覺えたので、加療攝生に勉めたが、何分にも此病氣の常として、何時如何なる變を見るかも知れない危險があると自分には思はれた。死生は大の命と云ひながら、自分の研究を經めないで死ぬのも學者として甚だ殘念である。西野博士は頭腦を休めよと云ふことを勸められたが、さうばかりは行かない。飲食物の衛生は充分にやるが、頭の方は使へるだけ使つて、研究の結果を纏めよう、纏まりさへすれば何時倒れても遺憾はない。中途までだけでも行つて見ろと云ふ考の下に、十一年の秋頃から執筆し出し、十三年の六月下旬頃からポツ〳〵原稿の一部ヅヽを完成しては岩波書店に渡し同年の十月始めに至つて、漸く製本出來した。執筆中地震騷ぎがあつて色〻に妨害されたり、原稿を燒いたり、紛失したりしては大變だと考へて、夜風呂敷に包んで枕下に置いたなど〻云ふ滑稽事もある。兎に角此著述は私に取つて忘れ難き記錄である。材料の如きも第一同英國留學の際大英博物館のライブラリーで書寫し、ハムステッドやハイゲートの下宿で思ひを凝したものもあり、第二同留學の折、サウスケンシントンのゴールド、スミス藏書（元フォックスウエル氏所有）を漁つて集めたものもあり、私に取つては、感極めて深い。兎に角著書は出來たが、私の健康は幸に保たれてる。續くだけ學問上に働いて、今少し仕事が出來さうだ。

大正十三年十月九日夜　　著者認む

誰か涙なくして之れを讀むことを得ん。

余は、教授の遺骸を守れる蕭然たる通夜の際、聊か所要ありて、正治乙雄兩令息に導かれて、故人の書齋に入る。教授は大阪に向つて出發せらるゝの直前まで、机に倚りて筆を走らせつゝありしものとおぼしく、書きかけの原稿五十四枚、淋しく案上に積まれて、教授の筆は「前述の如く」云々の文字を以つて、絶たれたり。表題存せざるも、外國爲替を論じたるものにして、恐らくは「貨幣・銀行・外國爲替」特殊問題研究中の一卷として上梓せらる可きものなりしなる可し。机上には教授が當時參讀せられつゝありしと覺ゆる Edgar S. Furniss 氏が Foreign Exchange の一書、猶ほ開らかれたるまゝに殘れり。されど教授は今、冷きむくろと爲りて關西の旅より歸れり。噫、教授は何時の日か、此の稿を次がん。數千卷の書を以て圍まれたる主なき書齋の夜は靜かに更けて、時は將に十二時に垂んとす。燈光冷かに照して、人語沈む。

教授の著作目錄を僅少なる日數中に作製するは決して容易の業ならず。而も永田清、寺尾琢磨兩氏の非常なる精勵によりて之れを左に掲ぐることを得たり。而も固より缺漏なきを保せず。大方諸君の示教を俟つて完成を期す。

堀江歸一教授著作目錄

（一）著書

貨幣制度論概要	明・三五	財政學	明・四二（實文館）
ダンバー氏銀行論（世界經濟叢書第七册）	明・三六（同文館）	增訂最新銀行論	明・四二（同文館）
銀行制度論	明・三六	關稅問題（最近經濟問題叢書第一卷）	明・四二（隆文館）
最新貨幣論	明・三七（同文館）	增訂改版財政學	大・元（實文館）
最新銀行論	明・三七（同文館）	經濟學橫義	大・二（實業之日本社）
國際商業政策	明・三八（同文館）	歐洲戰時の經濟財政	大・三（慶應義塾出版局）
海外金融市場	明・三九（粟山書店）	銀行論	大・三（同文館）
本邦通商條約論	明・四〇（粟山書店）	貨幣論	大・三（同文館）
增訂改版最新貨幣論	明・四一（同文館）	改訂五版銀行論	大・五（同文館）
英國公債整理事情	明・四一（東京交換所）	最新財政學	大・六（實文館）
		勞働問題十論	大・七（實文館）

支那經濟小觀　大・七（新美書院）
勞働問題の現在及び將來　大・八（大鐙閣）
經濟組織改造論　大・九（大鐙閣）
勞働組合論　大・九（國文堂）
世界の經濟は如何に動くか　大・一〇（岩波書店）
社會經濟研究　大・一〇（國文堂）
增補、勞働問題の現在及び將來　大・一〇（大鐙閣）
增訂改版貨幣論　大・一一（同文館）
續編、世界の經濟は如何に動くか　大・一一（岩波書店）
國際經濟と國民經濟　大・一一
改訂增補、財政學　大・一二（寶文館）
增訂改版、銀行論　大・一二（同文館）
續編國際經濟と國民經濟　大・一三
日本の經濟的危機　大・一三（アテネ書院）
英國現代の經濟　大・一三（岩波書店）
金融及金融機關（銀行叢書第二編）　大・一四（岩波書店）
增補改訂、世界の經濟は如何に動くか　大・一四（日本評論社）
國民經濟の話（通俗財政經濟大系一）　大・一四（改造社）
改訂增補、國際經濟と國民經濟　大・一五（寶文館）
增訂改版、財政學　大・一五（改造社）
國際經濟總論　大・一五　大鐙閣）
金融經濟一斑　大・一五（改造社）
貨幣銀行外國爲替（上、下）　昭・元（政治教育協會）
世界經濟と國際金融　昭・元（政治教育協會）
續編、世界經濟と國際金融　昭・一（同文館）
五訂改版、銀行論　昭・二（同文館）
五訂改版、貨幣論　昭・二（大鐙閣）
金融と恐慌　昭・二（寶文館）
財政學綱要　昭・二（改造社）
金貨本位制度の興廢　昭・二（改造社）
英國預金銀行制度論

（二）叢書及合著中に入れるもの

本邦經濟社會の重要問題（教育新潮叢書）　大・五（東京教育新潮研究會）
帝國財政一斑（時事講演集）　大・九（民友社）
世界經濟思想の變動（現代講演集）　大・九（慶應義塾大學社會問題講演）
勞働組合の現在及將來（慶應義塾大學社會問題講演）　大・九（慶應義塾出版局）
アダム・スミスの租稅論（經濟學說研究）　大・一三（岩波書店）
國家資本主義（現代經濟思潮講演集）　大・一三（岩波書店）
國際經濟と國內經濟（通俗經濟講座）　大・一四（日本評論社）
現代の經濟（アルス文化大講座一―二）　大・一五（アルス）
失業問題（社會問題講座二）
金融論、卷頭言（同　三）　大・一五（新潮社）
外國貿易問題（社會經濟體係八―九）　昭・二（日本評論社）
（猶ほこの外、商業大辭書、經濟大辭書等の各項を擔當せられたり）

（三）雜誌論文

二大政黨の對立に就て　明治三十一年（慶應義塾學報一）
復本位制に關する妄議を排す　（同　三）
對外經濟政策の原則　（同　一五）

明治三十二年

相續稅法に關する近代の學說　（慶應義塾學報一二）
私立大學に關する所感　明治三十五年（同）
學事奬勵の方法　明治三十六年（同）
政府の專賣事業を論ず　（同）
英米獨三國に於ける經濟學の研究　明治三十八年（同）
學者の言論自由　（同）
英國政界の將來　明治三十九年（慶應義塾學報一〇）
財政に於ける官有鐵道の地位　（慶應義塾學報一〇一）
社會主義に對する政府の將來　（同　一〇三）
近代の財政に於ける經費の地位　（同　一〇八）
學問の獨立に就て　（舊）三田評論三九）
フランス銀行の紙幣發行制限擴張に就て　（國民經濟雜誌一ノ一）
關稅報復並に關稅互惠を論ず　（同　一ノ一）

明治四十年

所得稅法改正の議　（同　一ノ二）
兌換券制限外發行法を論ず　（同　一ノ三）
外國通貨銀行金融に關する要報　（同　一ノ三）
外國財政に關する要報　（同　一ノ四）
公債價格維持策を論ず　（同　一ノ五）

明治四十年

工場法概論（一）（慶應義塾學報一〇三）
同　（二）　（同　一一五）
米國富豪征伐の實狀　（同　一二三）
銀價騰貴の原因並に影響　（國民經濟雜誌二ノ一）
英國所得稅法調査委員會報告　（同　二ノ二）
中央銀行增資論　（同　二ノ四）
保證準備制限擴張論　（同　三ノ三）
米國の移民政策を論ず　（同　三ノ五）

明治四十一年

米國學者の英國憲法政治論　（慶應義塾學報一〇六）
英國學者の氣質　（同　一三四）
現行通商條約改締論　（國民經濟雜誌五ノ三）

明治四十二年

租稅制度に於ける土地差增稅の地位　（三田學會雜誌一ノ二）
米國大學の權威　（慶應義塾學報一三九）
我國商業政策の方針を論ず　（國民經濟雜誌六ノ三）
英獨兩國勞働者の生活狀態　（同　六ノ五）
英國財政の現狀並に將來　（同　七ノ一）

英獨兩國に於ける中央銀行の問題　（同　七ノ六）
明治四十三年
日本銀行增資問題　（三田學會雜誌三ノ一）
英蘭銀行に關する研究　（同　三ノ一―二）
勞働取引所論　（同　二ノ三）
英國の銀行準備金問題　（同　三ノ四―五）
救貧法調査委員會報告と失業問題　（同　四ノ一―二）
英國の豫算案議事とコンソル公債問題　（同　四ノ三）
商業政策に關する時論　（同　四ノ四）
公債借換論　（國民經濟雜誌八ノ三）
英國の國運に對する悲觀說　（慶應義塾學報一五一）
英國社會政策雜感　（同　一六〇）
明治四十四年
英國政界に於ける勞働者の地位　（慶應義塾學報一六八）
中央銀行制引政策の補助的手段　（國民經濟雜誌二一ノ三―三）
英國職工組合とカスボーン判決　（國家學會雜誌二五ノ六）
國家と社會的生活の完成　（刑事法評林三ノ四）
明治四十五年
エルベルフエルド救貧制度　（三田學會雜誌六ノ一）
英國職工組合の法制的地位を論じて　（同　六ノ三）
最低賃銀國定制度に及ぶ　（慶應義塾學報）
當今の財政問題　（同）
減債か增稅か　（日本經濟新誌一〇ノ七）
物價騰貴の防遏と國際的計畫　（同　一〇ノ一〇）
英國同盟罷工所感　（同　一一ノ七）
英國救貧法小論　（國民經濟雜誌一二ノ一）
英國勞働取引所の事業成績並に執務法の一斑　（同　一三ノ五）
大正二年
英國々民保險法における失業保險制度　（三田學會雜誌七ノ一）
同盟罷業と獨佛兩國の法制　（同　七ノ一）
英國における勞働不安の狀態　（同　七ノ三）
英國近時の勞働紛議　（國民經濟雜誌一五ノ五）
英國最低賃銀裁定局法施行の實績　（同　一四ノ五）
我國財政上の積極主義　（日本經濟の新誌一二ノ七）
當今の財政問題　（慶應義塾學報一八六）
大正三年
減債基金の今昔　（三田學會雜誌八ノ一）
兌換制度の本體と變體　（同　八ノ二）
職工組合の組織　（同　八ノ五）
加奈陀工業紛議調査法實績　（同　八ノ六）
歐洲開戰後の倫敦金融市場　（同　八ノ八）
歐洲戰爭中の倫敦金融市場　（同　八ノ九）
利益分配並に勞資協同制度に關する調査　（同　八ノ九）
コンミツション問題　（中央公論　二九ノ三）
新聞改良論　（同　二九ノ五）
經濟學上より國產奬勵說を駁す　（同　二九ノ一）
我國財政策の主義如何　（財政經濟時報一ノ一）

戰後に於ける日本の資本的獨立　（同　一ノ一二）
大正四年
英國最低賃銀裁定局法施行の狀況　（三田學會雜誌九ノ一二）
歐洲戰時の中央銀行　（同　九ノ一二）
英佛獨諸國の戰時財政　（同　九ノ一三）
カルツザース氏著「戰爭とロムバード街」　（同　九ノ四）
倫敦金融市場と事變通貨の供給　（同　九ノ五）
歐洲戰事に於ける米國の金融政策並に聯合準備金法の運用　（同　九ノ八）
恐慌後の倫敦金融市場に於ける種々の變態　（同　九ノ八）
歐洲戰爭と國際貸借殊に英米兩國の貸借關係　（同　九ノ一三）
英國戰時の產業組織　（同　九ノ一二）
歐洲戰爭と本邦經濟社會の將來　（中央公論　三〇ノ五）
社會問題と人權の尊重　（同　三〇ノ七）
英國の海外放資制限と我國民の覺悟　（財政經濟事報二ノ三）
化學加工製品の輸入杜絕と善後策　（同　二ノ六）
歐洲社會黨講和運動の眞相　（同　二ノ八）
金融調節の愚策　（同　二ノ一一）
英國戰時の社會政策　（外交時報二一ノ二四）
ロイドヂヨージ氏の過去並に將來　（同　二一ノ二五）
大正五年
印度の貨幣並に金融制度に關する研究（三田學會雜誌一〇ノ二）
英國の對外放資回收に關する規定一斑　（同　一〇ノ三）
歐洲諸國の戰費と戰時財政　（同　一〇ノ三）
兌換制度の停止と復興　（同　一〇ノ四）
全米貨幣制度統一の計畫　（同　一〇ノ五）
米國銀行制度の新型　（同　一〇ノ六）
歐洲戰爭と米國の貿易狀態　（同　一〇ノ七―八）
歐洲戰爭と英國勞働者の狀態　（同　一〇ノ八―九）
ヴイクトリア並に新西蘭勞働立法　（同　一〇ノ一〇―一一）
英佛兩國對獨逸貿易上の關係　（同　一〇ノ一二）
景氣恢復と一般經濟界　（中央公論　三一の二）
歐洲戰爭の永續と我國經濟社會の利害　（同　三一ノ五）
再び朝野論爭の焦點となるべき減債基金問題　（同　三一ノ一三）
產業政策確立の急務　（財政經濟時報三ノ四）
猶の眼の如き政府の正貨政策　同　三ノ九）
一九一六年の世界經濟觀　（太陽二二ノ二）
歐洲戰後に於ける經濟社會の變動　（同　二二ノ八）
國際經濟と道德　（同　二二ノ一〇）
工場法制始めて成る　（同　二二ノ一一）
保護事業整理の必要　（同　二二ノ一四）
工場法施行規則を評す　（勞働及產業六一）
諸物價騰貴の將來　（生活　四ノ四）
大正六年
英國兌換制度の將來　（三田學會雜誌一一ノ一）
合衆國の新財政策　（同　一一ノ二）

印度の金融と印度證券　（同　一一ノ三）
戰後の關稅政策　（同　一一ノ四―五）
歐洲戰時に於ける通貨、物價、爲替相場（同　一一ノ五―六）
歐洲戰時財政に於ける國債の地位　（同　一一ノ七―八）
英國に於ける戰時勞働不安　（同　一一ノ九―一〇）
成金論　（中央公論三二ノ一）
物價騰貴と中流社會の生活難　（同　三二ノ三）
媾和期に於ける我經濟社會の變動と國民の用意　（同　三二ノ六）
政府の物價政策を論ず　（同　三二ノ一二）
一九一七年の國際經濟　（太陽　三三ノ一）
米國參戰と世界經濟の將來　（同　三三ノ五）
戰爭景氣の續否如何　（同　三三ノ九）
同盟罷業と政府の責任　（同　三三ノ一〇）
內閣の財政策を評す　（經濟時論　一ノ一）
復古的經濟思想　（同　一ノ六）
輸出貿易の將來　（實業之日本二ノ二一）

大正七年

支那幣制改革雜記　（三田學會雜誌一二ノ三）
歐洲戰後の勞働問題　（同　一二ノ四）
英蘭銀行條例改正論　（同　一二ノ五）
戰爭と信用通貨並に財政　（同　一二ノ五―九）
英國戰時の食糧問題と農業政策　（同　一二ノ七―八）
通貨の膨脹　（同　一二ノ一〇）
資本徵課金論　（同　一二ノ一二）
財政上より視たる支那　（中央公論三三ノ一）
對西比利亞經濟政策　（同　三三ノ五）
通貨收縮策と物價調節及輸出貿易との關係（同　三三ノ九）
高橋藏相の財政意見を叱正す　（同　三三ノ一二）
戰時經濟の反動時代　（太陽二四ノ三）
經濟上より視たる戰時經營　（同　二四ノ七）
復員に關する經濟上の諸問題　（同　二四ノ八）
米價問題　（同二四ノ一〇）
媾和來と經濟界の現狀　（同三四ノ一二）
媾和問題の經題的視察　（同二四ノ一四）
米價問濟の根本的解決　（日本及日本人七三八）
積立勞働保險制度を提唱す　（保險銀行時報九ノ八―一二）
外國貿易の前途はどうなるか　（實業之日本二一ノ一一）
物價調節策と其の效果　（日本經濟新誌二三ノ七）

大正八年

媾和に伴ふ經濟上の問題　（三田學會雜誌一三ノ一）
勞働者を壓迫したる英國法制の沿革一般　（同　一三ノ二―三）
非職工組合論　（同　一三ノ四）
勞働者と產業管理權　（同　一三ノ六）
手形引受と合衆國の金融市場　（同　一三ノ七―八）
英國の勞働黨は何を要求するや　（同　一三ノ八）
第一次國際勞働大會の議事事項を論ず　（同　一三ノ一〇）
英國勞働界の三角同盟　（同　一三ノ一一）
勞働運動を壓迫する法制　（同　一三ノ一二）
不景氣襲來に對する觀察　（改造　一ノ六）
勞働問題の解決に官僚的社會政策及び主從的俗說を排す　（中央公論三四ノ二）
勞働問題の解決の一案として工業徵募制度を提唱す　（同　三四ノ四）
將に來らんとする經濟政策上の革新　（同　三四ノ五）
對支借款團問題と日支經濟關係　（同　三四ノ七）
勞働問題講話　（同　三四ノ八）
金權者流の利益に偏倚する現行稅法の改革（同　三四ノ九）
物價調節策としての通貨收縮と公定相場論（同　三四ノ一〇）
新聞職工の罷業と新聞休刊事件　（同　三四ノ一一）
俸給衣食者生活難問題　（同　三四ノ一一）
川崎造船所怠業の研究と我國勞働運動の前途　（同　三四ノ一二）
友愛會其の他の勞働團體に與ふ　（同　三四ノ一三）
世界再建設と國際經濟　（太陽二五ノ一）
經濟生活の不公平を匡せ　（同二五ノ一〇）
勞働爭議の解決策　（同二五ノ一一）
資本勞働協調主義を排す　（同二五ノ一二）
國際化せる勞働問題　（東京經濟雜誌二〇〇〇）
日本現時の勞働問題　（東方時論四ノ五）
物價の將來　（實業之日本二二ノ一五）
有識無產階級論　（雄辯一〇ノ一一）
原內閣の勞働政策を笑ふ　（同　一〇ノ一三）
國際勞働會議と日本の態度　（黎明會講演集）
勞働問題に於て孤立する日本　（國體　一ノ三）

大正九年

英國のインダストリアル・ユニオンズム（三田學會雜誌一四ノ一）
合衆國の最低賃銀制度を論じて移民問題に及ぶ　（同　一四ノ二）
英國石炭業委員會報告の概要　（同　一四ノ二―三）
利益分配制度を論ず　（同　一四ノ四―六）
獨逸戰後の財政經濟　（同　一四ノ五）
經營權分配制度を論ず　（同　一四ノ七）
科學的經營法と勞働組合　（同　一四ノ八）
英國勞働問題に關する新刊書　（同　一四ノ八）
米國移民問題の經濟的方面　（同　一四ノ一〇）
勞農露國の勞働組合　（同　一四ノ一二）
議會改造、勞働者代表並に經濟組織革新　（改造二ノ二）
經濟上より視たる家族制度　（同　二ノ三）
民衆を敵とする政治　（同　二ノ四）
總選擧所感　（同　二ノ五）
生產組織の社會化　（同　二ノ五）
不景氣襲來に對する觀察　（同　二ノ六）
總選擧と內閣の運命　（同　二ノ六）
恐慌に對する一部の觀察　（同　二ノ七）
臨時議會と當面の問題　（同　二ノ七）

議會政治を否認する思想　（同　二ノ九）
國際勞働會議の歸趨を論じて我國勞働問題の將來に及ぶ　（中央公論三五ノ一）
歐洲戰爭と經濟思潮の動搖　（同　三五ノ一）
支那に於ける日英米の三國關係　（同　三五ノ二）
社會改造の見地より視たる新所得稅法批判　（同　三五ノ三）
不景氣の襲來と我國民生活　（同　三五ノ四）
失業者問題の解決　（同　三五ノ五）
恐慌來と國民生活の不安　（同　三五ノ七）
社會奉仕の觀念の欠如せる我國資本家階級　（同　三五ノ八）
國務大臣の株式賣買事件　（同　三五ノ八）
我國社會公益事業の現狀を難ず　（同　三五ノ一〇）
貨幣價値の大低落と通貨整理問題　（同　三五ノ一一）
不景氣の國民生活及國民思想に對する影響と教訓　（同　三五ノ一一）
下落すべくして下落せざる小賣相場問題　（同　三五ノ一二）
不自然なる日本銀行利下說を排して恐慌再襲の危險を說く　（同　三五ノ一三）
地方民の文化的現狀　（同　三五ノ一三）
國際勞働會議顚末　（同　三五ノ一三）
勞働會議成績批評　（ダイヤモンド八ノ一）
如何に經濟組織を改造するか　（太陽　二六ノ一）
反動來の經濟社會　（同　二六ノ二）
經濟會議に對する樂觀と悲觀　（同　二六ノ五）
經濟界の將來如何　（同　二六ノ八）
帝國財政の危機　（同　二六ノ九）
不景氣は何日迄續くか　（同　二六ノ一〇）
不景氣に處する道　（同　二六ノ一一）
不景氣救濟論　（同　二六ノ一三）
　　大正十年　（同　二六ノ一四）
銀價騰貴時代の印度通貨問題　（三田學會雜誌一五ノ一）
英國所得稅法改革に關する新研究　（同　一五ノ三—四）
對外放資と伸縮性　（同　一五ノ五）
最近數年間に於ける銀價の動搖　（同　一五ノ六）
國際貸借の理論と償金問題　（同　一五ノ七）
工業協約制度を論ず　（同　一五ノ一〇）
國際間の通貨並に信用問題　（同　一五ノ一一—一二）
日本の經濟生活を改造する道　（改造三ノ一）
國民經濟とミリタリズム　（同　三ノ三）
經濟眼で視た日本現時の政治　（同　三ノ五）
歐洲の經濟社會は何時如何にして恢復するか　（同三ノ一三）
大正十年度の豫算案を評す　（中央公論三六ノ一）
物價下落と一般國民並に農民生活　（同　三六ノ三）
勞働者道の確立　（同　三六ノ三）
商業中心主義より工業中心主義へ　（同　三六ノ四）
政界の陰謀と言論壓迫　（同　三六ノ四）
英國炭坑罷業に就ての諸觀察　（同　三六ノ五）
政商問題　（同　三六ノ五）
獨逸の償金支拂を中心として國際經濟上に生ずる變動　（同　三六ノ六）
國際經濟同盟に實行的價値ありや　（同　三六ノ七）
都市と田園の經濟觀　（同　三六ノ八）
日本の勞働運動は如何に發展するか　（同　三六ノ九）
國際間に於ける感情、利害、正義の關係　（同　三六ノ一〇）
現時の經濟思想より神戸勞働爭議を批判す　（同　三六ノ一一）
無產階級者專制に對するインテリゲンチヤの感想　（同　三六ノ一一）
米が再び高くなつたら　（同　三六ノ一一）
小賣商の暴利問題　（同　三六ノ一二）
農村に於ける地主對小作人爭議　（同　三六ノ一三）
我國人口制度の改善　（太陽二七ノ一）
經濟界は安定するか　（同　二七ノ二）
景氣恢復の捷徑　（同　二七ノ四）
物價問題の再燃恐るべし　（同二七ノ一二）
富豪の社會的地位　（同二七ノ一三）
　　大正十一年
勞働組合に關する諸問題　（三田學會雜誌一六ノ一—三）
アダムスミスの自由貿易除外論　（同　一六ノ四）
國際勞働組合主義の運動　（同　一六ノ五）
英國に於ける銀行合同の趨勢と其の特色　（同　一六ノ七）
對外債務廢棄問題　（同　一六ノ八）
物價經濟に關する二三の考察　（同　一六ノ一〇）
英國に於ける經濟的秩序の恢復　（同　一六ノ一一）
今議會と當面の問題　（改造四ノ二）
內閣改造の失敗と將來の政局　（同　四ノ六）
加藤內閣に對して私の感じた事　（同　四ノ七）
物價問題解決の難局　（同　四ノ九）
歐洲の經濟社會は何日になつて復興するか　（同　四ノ九）
產業資本の供給と金利引下問題　（同四ノ一〇）
金禁輸問題に對する政府の聲明書　（同四ノ一〇）
營業稅全廢論　（同四ノ一一）
一般不景氣と軍備縮少より來る失業問題　（中央公論三七ノ一）
武力的競爭から國際經濟競爭へ　（同　三七ノ二）
四國協商並に極東協約の成立と對支經濟政策　（同　三七ノ三）
社會經濟上より見たるゼノア會議　（同　三七ノ四）
高橋內閣の末路と其の後繼者　（同　三七ノ四）
國民は不景氣の慘狀に堪え得るか　（同　三七ノ五）
退嬰經濟思想を排して積極的經濟政策の確立に及ぶ　（同　三七ノ六）
物價騰貴の勢を促進して國民生活難を顧慮せぬ高橋內閣の責任　（同　三七ノ六）
經濟政策を刷新せざれば國運は傷く　（同　三七ノ七）
資本主義的經濟觀を改めざれば世界平和並に人類愛の實現難し　（同　三七ノ八）
富豪の脫稅所罰と稅法制定者の責任　（同　三七ノ一〇）
都市社會問題より農村社會問題へ　（同　三七ノ一〇）

政治と實業との關係を論じて現下の諸問題に及ぶ　（同　三七ノ一一）
感情に偏して理智に反する列國の對獨露態度（同　三七ノ一一）
官吏階級の生活難を論じて計表本位制による增俸を提唱す　（同　三七ノ一二）
豐年と農民の利害　（同　三七ノ一二）
小學教員及び下級警察官の優遇法と其の實の改善案　（同　三七ノ一二）
シベリア撤兵と軍閥の專恣　（同　三七ノ一二）
經濟思想の新傾向　（日本及日本人）
世界經濟上の諸問題　（銀行研究二ノ五）
特殊銀行解放の必要　（同　三ノ三）

大正十二年

國際信用復興問題　（三田學會雜誌一七ノ一）
合衆國豫算決算制度の改正　（同　一七ノ四）
國家と失業並に失業者　（同　一七ノ六）
アダム・スミスの租稅論　（同　一七ノ七）
國際貸借に於ける合衆國の地位　（同　一七ノ八）
減債基金の理論と實際　（同　一七ノ一二）
金融の趨勢と中間景氣　（エコノミスト一ノ一）
物價は何故下落せないか　（同　一ノ二）
特殊銀行の不始末を如何にする　（同　一ノ三）
銀行業整理問題　（同　一ノ四）
公債政策一新の必要　（同　一ノ六）
悲しむべき外資輸入　（同　一ノ七）
明年度豫算と經濟社會　（同　一ノ八—九）
英國議會の資本主義論戰　（同　一ノ一〇）
獨逸の金融と中央銀行　（同　一ノ一一—一二）
仕拂猶豫法の結末如何　（同　一ノ一三）
帝都復興事業の難關　（同　一ノ一四）
民間の復興事業を盛んならしむる道　（同　一ノ一五）
復興事業と私人の活躍　（同　一ノ一六）
復興景氣の來否如何　（同　一ノ一七）
英國の關稅改革問題　（同　一ノ一八）
我國に行はるゝ租稅論爭　（改造　五ノ三）
アダム・スミスの財政學說　（同　五ノ六）
國際貸借理論と我國經濟界の危機　（同　五ノ七）
對支經濟政策の根本的改造　（同　五ノ八）
破壞された東京市　（同　五ノ一〇）
震災後の金融並に金融政策　（同　五ノ一一）
國政並に市政に對して私の持つ不服の廉々（中央公論三八ノ一）
暴力的團體の存在を默認するか　（同　三八ノ一）
銀行業者の不法背任行爲を難す　（同　三八ノ二）
普選實行後の政界　（同　三八ノ二）
人氣取り政略を出ざる我が政黨者流の農村振興案　（同　三八ノ三）
警視廳を督勵す　（同　三八ノ三）
世界の平和を促進するに必要なる經濟手段（同　三八ノ四）
極左極右の兩主張と行動とを排す　（同　三八ノ四）
對支文化事業の經濟的觀察　（同　三八ノ五）
思想の險惡化と行動の兇暴化を慨す　（同　三八ノ五）
朝鮮經濟私觀　（同　三八ノ六）
露國承認問題　（同　三八ノ六）
知識階級と無產階級の相互抱合　（同　三八ノ六）
地方に父祖の業を繼ぐ中學卒業生　（同　三八ノ六）
大量生產の功過　（同　三八ノ六）
共產主義者檢舉事件に就て　（同　三八ノ七）
地租委讓並に日貨排斥問題　（同　三八ノ八）
暴力行使、直接行動、脅迫强請等の取締りは緩意に非るか　（同　三八ノ八）
獨逸賠償金問題を中心とせる國際經濟の變局　（同　三八ノ九）
警察官の職責と人權蹂躙　（同　三八ノ九）
東京市の災害と經濟的復興策　（同　三八ノ一〇）
帝都復興に伴ふ諸種の社會問題　（同　三八ノ一二）
大災厄期に於ける歲末經濟觀　（同　三八ノ一二）
戰爭の試練を受けた歐洲と天災の試練を受けた日本　（同　三八ノ一二）
外資輸入に對する政府の所置を難ず（東京工場懇話會々報一四）
金融及び金融機關　（銀行通信錄四五一—五三、四五六—五八）

大正十三年

ダウズ委員會の獨逸賠償金問題提案　（三田學會雜誌一八ノ七）
大正十三年の經濟社會　（エコノミスト二ノ一—二）
外債募集の影響如何　（同　二ノ三）
金利引下問題　（同　二ノ四）
外債成立と金融　（同　二ノ五）
火保問題と經濟復興　（同　二ノ六）
爲替下落の對策　（同　二ノ七）
國際勞働會議と日本　（同　二ノ八）
商工業者に對する復興資金　（同　二ノ九）
如何にして貿易の逆勢に當るか　（同　二ノ一〇）
保證準備擴張の是非　（同　二ノ一一）
獨逸の復活とダウズ委員會　（同　二ノ一二）
消極的經濟政策の意義　（同　二ノ一三）
奢侈抑制と租稅政策　（同　二ノ一四）
交通機關の罷業事件　（同　二ノ一五）
行政財政整理の根本義　（同　二ノ一六）
米國と歐洲經濟の復興　（同　二ノ一七）
景氣恢復の時期如何　（同　二ノ一八）
英國の貨幣政策　（同　二ノ一九）
財政策に於ける消極と積極　（同　二ノ二〇）
米國の金融政策　（同　二ノ二一）
爲替對策如何　（同　二ノ二二）
對支經濟政策と日本　（同　二ノ二三）
明年度の財政計劃　（同　二ノ二四）

國際經濟と我國の復興事業　（改造　六ノ一）
勞働政策金權政治並に貴族政治　（同　六ノ二）
英國勞働黨と經濟組織の革新　（同　六ノ三）
外債によつて曝露された我國財政の不信用　（同　六ノ四）
對米移民問題管見　（同　六ノ五）
公益事業と勞働爭議　（同　六ノ八）
財政整理の根本義を論ず　（同　六ノ九）
金貨本位制復興の可否、時期並に方法　（同　六ノ一一）
大正十三年の財政計劃と復興豫算を評す　（中央公論　三九ノ一）
普選の實驗を擧ぐべく新有權者への辭　（同　三九ノ一）
遞信鐵道等の官營事業に於ける怠慢を難ず　（同　三九ノ二）
帝都復興規模の大小と地方農村の盛衰問題　（同　三九ノ二）
財政的信用の所謂三等國に墮たる日本　（同　三九ノ三）
紛々擾々たる政界歸趨如何　（同　三九ノ三）
經濟的危機に瀕せる日本　（同　三九ノ四）
俗吏輩の所謂思想善導論に就て　（同　三九ノ四）
特別議會後の復興經濟　（同　三九ノ五）
政友本黨と護憲三派の對比觀　（同　三九ノ五）
火災保險金支拂から生ずる諸問題　（同　三九ノ六）
總選擧の結果と憲政會の進路　（同　三九ノ六）
米國の排日立法と我國の經濟的不安（同　三九ノ七）
ブルジョアの不安とプロレタリアの悲慘（同　三九ノ七）
米貨非買運動の經濟的價値　（同　三九ノ七）
新內閣の財政整理に對する私の希望（同　三九ノ七）
財政上に於ける當今の要務を論じて當局に與ふ　（同　三九ノ八）
排日立法に釀成された排外的氣分の批判　（同　三九ノ八）
歐洲經濟の安定と露獨兩國　（同　三九ノ九）
上院改革と農村振興　（同　三九ノ九）
現內閣の行ふ緊縮の程度と景氣恢復の時期　（同　三九ノ一一）
消極的節約宣傳と積極的生產奬勵　（同　三九ノ一一）
郵船會社の事件に直面して會社經營の根本義を論ず　（同　三九ノ一二）
豫算方針の討議に曝露した聯立內閣の不統一　（同　三九ノ一二）
スパイ政策是非　（同　三九ノ一三）
工場法改正と資本家　（東京工場懇話會々報　一二）
當今に於ける經濟上の諸問題　（中央銀行會通信錄）
大正十四年
歐洲戰爭に基く國際金融上の關係　（三田學會雜誌　一九ノ一）
金貨本位制度に關する根本問題　（同　一九ノ二）
歐洲戰債の整理問題　（エコノミスト　三ノ一）
銀行並に信託會社に對する政策　（同　三ノ二）
保證準備擴張の說　（同　三ノ三）
兌換制度に關する疑問　（同　三ノ四）
日本銀行の金利政策　（同　三ノ七）
財政と金融の改善　（同　三ノ八）
稅制整理の目標如何　（同　三ノ九）
英國の金輸出解禁　（同　三ノ一〇）
英國經濟的國策の動搖　（同　三ノ一一）
歐洲諸國の戰時公債と合衆國　（同　三ノ一二）
租稅負擔の公正　（同　三ノ一三）
財產稅と資本利子稅　（同　三ノ一四）
英金貨本位制の報告書を讀む　（同　三ノ一五）
財政は消極、經濟は積極　（同　三ノ一六）
支那關稅政策と日本　（同　三ノ一七）
預金利子の協定難　（同　三ノ一八）
日支兩國の經濟的關係　（同　三ノ一九）
資本家と勞働組合法　（同　三ノ二〇）
明年度豫算案に對する希望　（同　三ノ二一）
我國工業の死活問題　（同　三ノ二二）
爲替相場の恢復如何　（同　三ノ二三）
資本利子稅の得失　（同　三ノ二四）
現時財界の危機と其對策　（改造　七ノ一）
鎖國經濟の危險我國に迫る　（同　七ノ二）
普選實施と政治教育　（同　七ノ二）
兌換制度の確立と改造　（同　七ノ三）
勞働組合と農民組合との關係　（同　七ノ三）
失業と其對策　（同　七ノ四）
本邦銀行業の改善　（同　七ノ五）
英國に於ける無產政黨の勢力　（同　七ノ六）
經濟上から見た高等教育並に教育機關　（同　七ノ七）
稅制整理案批判　（同　七ノ九）
國際金融中心點に關する研究　（同　七ノ一〇）
支那の關稅自主權と日本の對支經濟關係（同　七ノ一二）
經濟的優勢の條件を論ず　（同　七ノ一三）
行政整理の犧牲者と新卒業生の就職難問題　（中央公論　四〇ノ一）
社會思想研究團の解散に就て　（同　四〇ノ二）
不景氣を最極點まで徹底せしめよ　（同　四〇ノ三）
世界の金融中心に對する英米の爭覇戰　（同　四〇ノ四）
經濟時事五題　（同　四〇ノ六）
經濟學に於けるある問題の解說　（同　四〇ノ七）
經濟社會の行詰りとその打開　（同　四〇ノ一〇）
食糧政策の確立　（同　四〇ノ一一）
勞働組合に對する資本家の謬見　（同　四〇ノ一二）
三政黨の稅制整理案　（同　四〇ノ一三）

金輸出解禁の時期並に方法	（公民講座一、　）	景氣恢復の一頓挫	（同　四ノ二〇）
勞働爭議調停策	（東京工場懇話會々報二一）	日本銀行と市中銀行	（同　四ノ二一）
大正十五年		歐洲經濟上の新運動	（同　四ノ二二）
インフレーションとデフレーション	（三田學會雜誌二〇ノ一）	國際政策の改善	（同　四ノ二三）
英吉利の炭坑並に炭業經濟	（同　二〇ノ七）	金解禁の時期と準備	（同　四ノ二四）
本年の經濟界はどうなるか	（エコノミスト　四ノ一）	我國の經濟はどう動くか	（改造　八ノ一）
景氣回復の道程	（同　四ノ二）	若槻內閣に望む	（同　八ノ二）
積極政策と景氣恢復	（同　四ノ三）	獨逸戰後の經濟と經濟政策	（同　八ノ三）
日本銀行の金利政策	（同　四ノ四）	經濟社會轉換期に關する豫測	（同　八ノ一〇）
銀行の固定貸付と其の整理	（同　四ノ五）	新經濟政策の基調如何	（同　八ノ一一）
爲替政策確立の必要	（同　四ノ六）	金融金利に關する問題	（同　八ノ一二）
最近三年の內外經濟問題	（同　四ノ七）	明年度豫算案と財政計劃	（同　八ノ一三）
金融制度の整理	（同　四ノ八）	昭和三年	
銀行制度の改善	（同　四ノ九）	英國炭抗爭議の發展	（三田學會雜誌二一ノ一）
日本銀行改善の問題	（同　四ノ一〇）	昭和二年のパニック（其經過と對策）	（同　二一ノ七）
日本銀行の兌換準備	（同　四ノ一一）	我國無產政黨の將來	（エコノミスト五ノ一）
經濟界の安定と振興	（同　四ノ一二）	國際經濟會議と日本	（同　五ノ二）
金輸解禁即行の是非	（同　四ノ一三）	經濟社會の兩面觀	（同　五ノ三）
財政方針と財界の景氣	（同　四ノ一四）	政界の小康と財界	（同　五ノ四）
第二次の稅制整理	（同　四ノ一五）	預金利下と金融	（同　五ノ五）
佛國の通貨爲替問題	（同　四ノ一六）	陳腐なる銀行分業論	（同　五ノ六）
佛蘭西の爲替對策	（同　四ノ一七）	支那は果して赤化するか	（同　五ノ七）
銀行重役の兼業禁止	（同　四ノ一八）	銀行破綻と銀行改善	（同　五ノ八）
張相土地收用と金融問題	（同　四ノ一九）	植民地銀行の使命と整銀整理	（同　五ノ九）
パニックの教訓と銀行業	（同　五ノ一〇）	休業銀行の預金者に與ふ	（同　四ノ二九）
パニックと國家補償による救濟	（同　五ノ一一）		
パニック救濟と物價の前途	（同　五ノ一二）		
小中商工業の金融を如何にする	（同　五ノ一三）		
下期の經濟社會豫想	（同　五ノ一四）		
銀行減配問題	（同　五ノ一五）		
財界沈衰と豫算編成	（同　五ノ一六）		
租委讓の實行的價値	（同　五ノ一七）		
パニック後の財界	（同　五ノ一八）		
財界不振時代と積極政策	（同　五ノ一九）		
不景氣時代の私經濟	（同　五ノ二〇）		
大銀行專制の金融政策	（同　五ノ二一）		
景氣は未だ回復せず	（同　五ノ二二）		
新豫算案を批判す	（同　五ノ二三）		
休銀整理遲延の打擊	（同　五ノ二四）		
岐路に立てる我國の經濟	（改造　九ノ二）		
經濟的國策の確立	（同　九ノ三）		
中產以下の社會と利殖金融	（同　九ノ五）		
パニックに襲はれた金融市場	（同　九ノ六）		
日本の滿蒙經濟政策	（同　九ノ一一）		
國家に有害なる田中內閣の財政策	（同　九ノ一二）		
アダム・スミスの國富論	（同　一〇ノ一）		
財界安定に就き高橋藏相に與ふ	（中央公論四二ノ六）		
川崎造船所救濟問題	（同　四二ノ八）		

附記

右の著作論文目錄は著書の全部と、主たる雜誌論文の大部分とを收錄せるものなり。匆卒の際とて、新聞及び通俗雜誌等に寄稿せられたる無數の論文は、遺憾乍ら悉く之を省略せざるを得ざりき。出來得べくんば、次の機會に是等をも漏なく採錄して完全なる著作目錄たらしめんと欲す。江湖の教示を得ば幸ひなり。

猶ほ右の目錄作製の際、快く材料を提供せられし慶應義塾圖書館、中央公論社及びエコノミスト社の好意に對して深甚の謝意を表す。

昭和二年十二月二十日

經濟學部研究室
寺尾琢磨
永田清